

障害学国際セミナー 2022
2022年2月27日（日）

第3セッション：セクシャリティ・リプロダクティブライツと自立生活

優生学の遺産—生殖、女性の身体、そして医療技術

松原 洋子

立命館大学副学長、立命館大学大学院先端総合学術研究科教授

優生学の現在

日本学術会議哲学委員会いのちと心を考える分科会（2020）『提言 人の生殖にゲノム編集技術を用いることの倫理的正当性について』[英語版、要約]（p.6） *松原は本報告書作成メンバー

「…優生学と社会的差別については、今日では、生殖に関する決定は国家ではなく、両親の自律性と個人の判断に委ねられ、人々の権利が守られる限り、かつての優生学の弊害のような問題は起こらないという理解が広がっている。」

「このような理解を背景に、遺伝性疾患に苦しむ人々の治療や医療支援への期待が、ゲノム編集技術の生殖への活用との関連で語られている。」

-
- 優生学は生物学的・医学的特徴にもとづき、生殖に介入する点で一貫している。
 - 本報告では女性の身体への医療技術の介入に注目する。

1. 優生学を達成するための二つの方法

積極的優生学:

望ましいとされる性質を持つ者を増やす取り組み

消極的優生学:

望ましくないとされる性質を持つ者を減らす取り組み

Source:

<https://eugenicsarchive.ca/discover/encyclopedia/5233c3ac5c2ec50000000086>

● 生殖への優生学的介入に使われる医療技術

消極的優生学:

- 不妊手術 (卵管結紮、卵管切除、精管結紮、精管切除)
- 子宮摘出、卵巣摘出、精巣摘出
- 卵巣や精巣への放射線照射
- 人工妊娠中絶
- 着床前診断 (PGD)
- 出生前診断

積極的優生学:

- PGD
- ヒトゲノム遺伝子編集 (生殖細胞系列ヒトゲノム編集)

2. 消極的優生学：不妊手術（断種）

日本の優生断種法

国民優生法（1940-1948）

第一条：本法ハ悪質ナル遺伝性疾患ノ素質ヲ有スル者ノ増加ヲ防遏スルト共ニ健全ナル素質ヲ有スル者ノ増加ヲ図リ以テ国民素質ノ向上ヲ期スルコトヲ目的トス

優生保護法（1948-1996）

第一条：この法律は、優生上の見地から不良な子孫の出生を防止するとともに、母性の生命健康を保護することを目的とする。

● 日本障害フォーラムの平行レポート (2019年6月)

障害者権利委員会への提出 日本への事前質問事項向け

第17条 個人をそのままの状態に保護すること

強制不妊手術:

- 優生学的理由による不妊手術が約 25,000 件
- 優生学的理由による強制不妊手術が約16,500件
- 強制不妊手術の対象者の約7割が女性

表1 優生保護法第4条・第12条による不妊手術の実施数 (1949-1996)

	第4条	第12条	合計
女性	9,711	1,601	11,312
男性	4,855	308	5,163
合計	14,566	1,909	16,475 (女性の比率 68.7%)

出典：利光恵子 (2016) 『戦後日本における女性障害者への強制的な不妊手術』立命館大学生存学研究センター, p.11

● 女性の身体への侵襲による生殖管理

優生保護法下での不妊手術の合計（優生保護・母体保護を理由とするものを含む）は約84万5000件

その約98%が女性に対する不妊手術

優生保護法改正後の現在も、強制的な不妊手術が存在する。

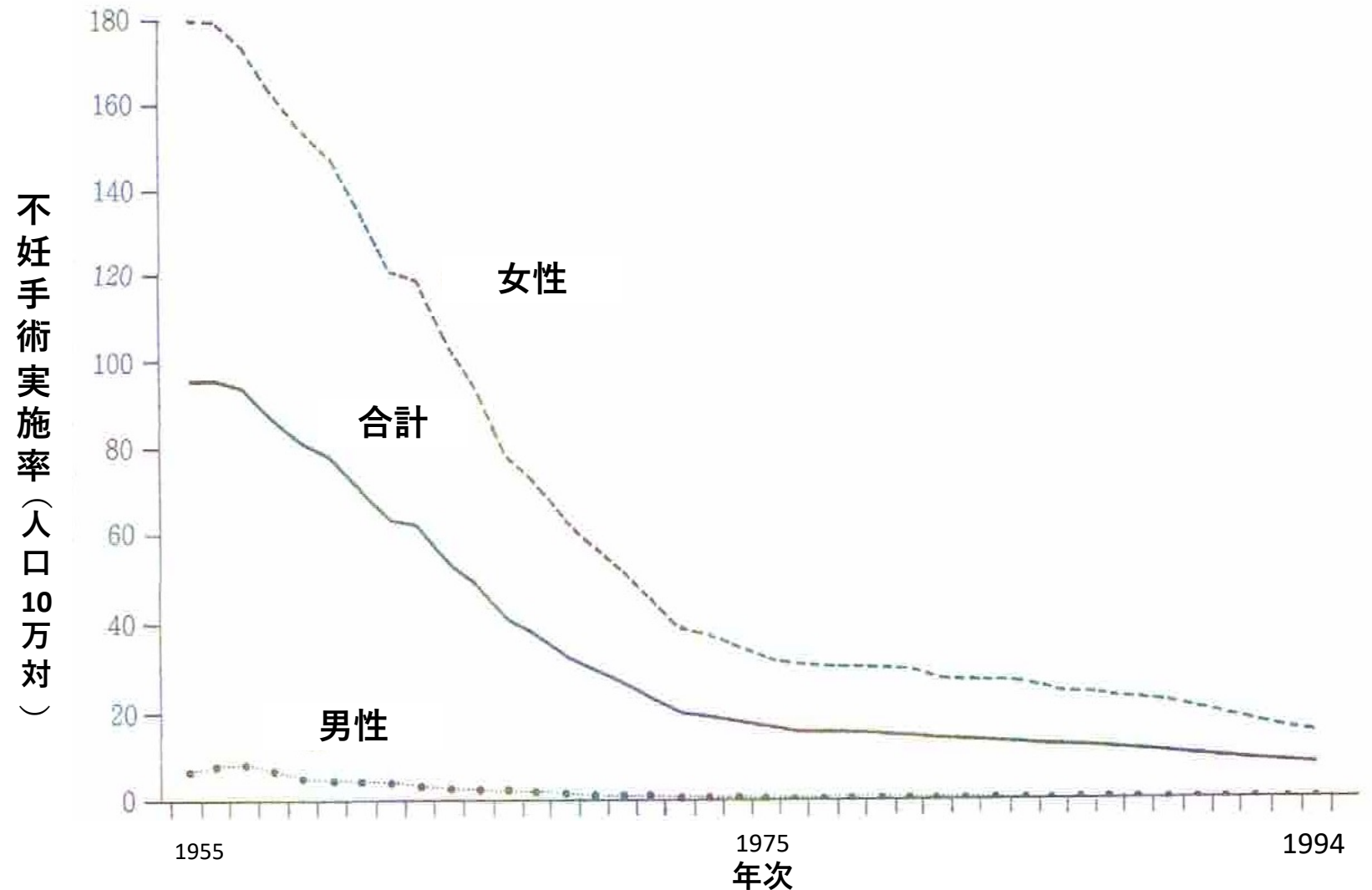


図1 性別にみた不妊手術実施率（人口10万対）の年次推移

出典：厚生省「平成6年 優生保護統計報告」（1995）

3. 積極的優生学: 遺伝性ヒトゲノム編集 (HHGE)

- これまで国際的な科学者共同体においては、遺伝性ヒトゲノム編集 (HHGE: heritable human genome editing)、すなわち生殖細胞系列遺伝子改変は安全性の問題や倫理的問題から実施されてこなかった。
- 2018年11月に科学者・賀建奎が、中国で遺伝子改変した双子の誕生に成功したと報告した。しかし、この実験は中国においても国際的にも、胚の遺伝的研究の倫理的ガイドラインに違反していた。
- 指導的な科学者たちは、遺伝性ヒトゲノム編集の臨床研究をしばらくの間国際的に行わないよう呼びかけた。ただし同時に、国際的な科学者共同体は遺伝性ヒトゲノム編集を臨床的に実施する経路のありかたについて議論を始めている。

● HHGE臨床研究への経路 1

遺伝性ヒトゲノム編集臨床研究国際委員会、全米医学アカデミー、全米科学アカデミー、英国王立協会（2020）
『遺伝性ヒトゲノム編集』（p.1）

International Commission of the Clinical Use of Human Germline Genome Editing, National Academy of Medicine, National Academy of Sciences, and the Royal Society (2020) *Heritable Human Genome Editing*

「これから親になろうとする人がその子どもに遺伝性疾患を伝えるリスクのあることがわかっている場合、遺伝性ヒトゲノム編集は、その疾患に罹患したり死亡したりすることのない血縁のある子どもを持つための重要な選択肢となりうる。」

「しかし、遺伝性ヒトゲノム編集の臨床応用では、基礎研究から応用研究に橋渡しする経路において必要な手順を示すために、安全かつ効果的な方法を確認することが不可欠となる。」



<https://www.nap.edu/catalog/25665/heritable-human-genome-editing>

● HHGE臨床研究への経路 2

遺伝性ヒトゲノム編集臨床研究国際委員会、全米医学アカデミー、全米科学アカデミー、英国王立協会（2020）
『遺伝性ヒトゲノム編集』

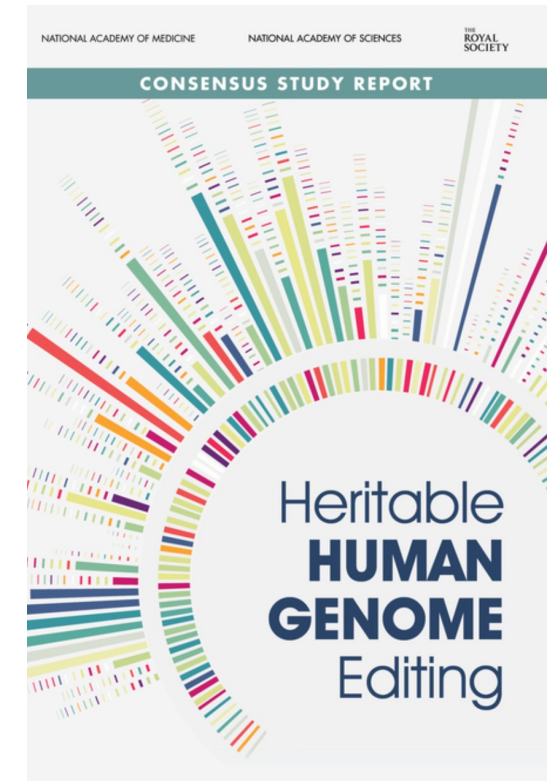
International Commission of the Clinical Use of Human Germline Genome Editing, National Academy of Medicine, National Academy of Sciences, and the Royal Society (2020) *Heritable Human Genome Editing*

報告書 勧告4

遺伝性ヒトゲノム編集初期利用の基準

1. 遺伝性ヒトゲノム編集の利用は重篤な一遺伝子疾患に限定すること。
本委員会は、重篤な一遺伝子疾患を重篤な病状あるいは早期死亡の原因となる疾患と定義する。
2. 遺伝性ヒトゲノム編集の使用は、重篤な一遺伝子疾患の原因であることが知られている遺伝子変異を、関連集団で一般的であり、疾患の原因でないことが知られている配列に変更することに限定される。

...



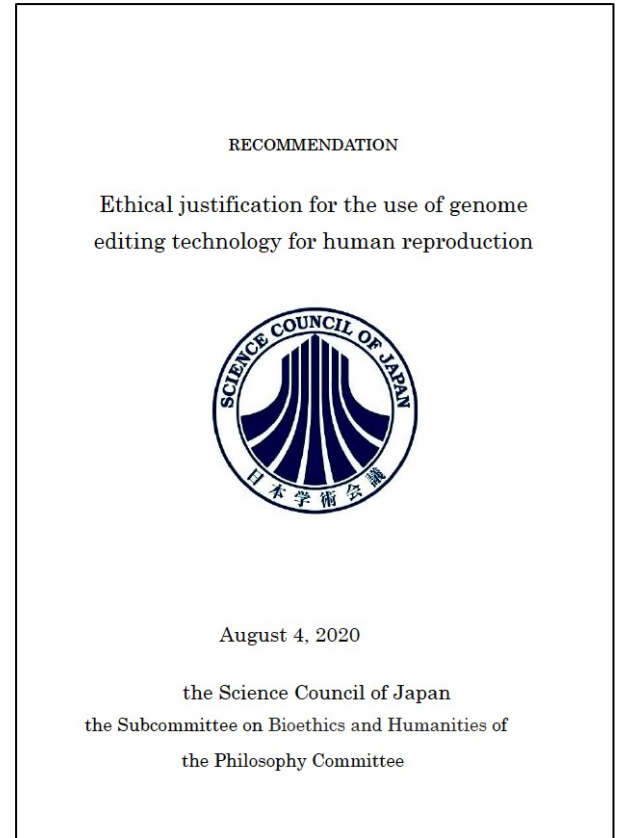
<https://www.nap.edu/catalog/25665/heritable-human-genome-editing> ⁹

● 日本学術会議哲学委員会いのちと心を考える分科会の提言 (2020年8月)

『提言 人の生殖にゲノム編集技術を用いることの倫理的正当性について』 [英語版、要約]
(p.6)

「かつての優生学は、遺伝的性質の遺伝を防止するために、望ましくないとされる遺伝的性質を根拠に実施された不妊手術や人工妊娠中絶を通して、女性の身体への侵襲を認めてきた。」

「ヒトの生殖におけるゲノム編集の利用は、遺伝的特性を前提に、もしも、胚や胎児に新たな遺伝性疾患が出現した場合、人工妊娠中絶や流産・死産によって疾患や障害を持つ子どもの誕生が回避されるという暗黙の了解のもとに行われる。」



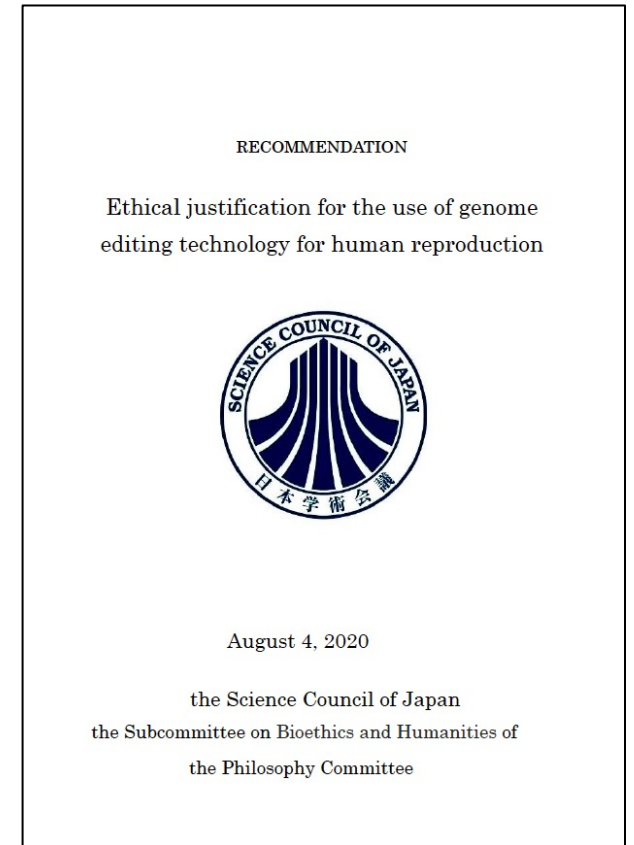
● 日本学術会議哲学委員会いのちと心を考える分科会の提言

(2020年8月)

『提言 人の生殖にゲノム編集技術を用いることの倫理的正当性について』 [英語版、要約] (p.7)

「特に、新しい優生学や社会的差別の課題との関連では、ゲノム編集を受けた胚や胎児に異常が発見された場合、中絶を積極的に選択する優生学的強制が働くことになる。」

「これは、ゲノム編集を用いた実験的治療の失敗を避けるための選択であり、女性の身体が実験的失敗の結果に対する**防波堤**として機能することが期待される。」



<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-t292-5e.pdf>

まとめ

- 優生学では一貫して、「遺伝的」または「不治」の疾患・障害という医学モデルに基づき、女性の身体が子孫の選別のための「防波堤」とされてきた。
- 障害のある女性をめぐる複合差別は、強制的な不妊手術や中絶だけでなく、生殖医療技術が行使される局面でも、優生学的な問題として出現する。
- 問題の背景には女性に偏る生殖役割の重さが存在する。性と生殖と医療技術の望ましい関係について、女性の身体を基準に検討する必要がある。